

# 「は」、「が」 選択と疑問詞の相互作用及び右方転移現象

村 田 明

キーワード：助詞「は」「が」 右方転移 疑問の韻律句

## 1. 「は」、「が」と疑問詞

野田（1985）は、主語に「が」<sup>1</sup>と「は」のどちらが付くかを、50 の場合に分けて提示している<sup>2</sup>。以下、i)～iv)の場合に対するいくつかの例を挙げる。

i) 述部に疑問の焦点がある疑問文の主語には「は」を付ける。

- (1) あの人 {は/\*が} 誰ですか。
- (2) お誕生日 {は/\*が} いつですか。
- (3) それ {は/\*が} 何の本ですか。
- (4) 山下さん {は/\*が} どんな音楽をよく聞きますか。
- (5) 銀行 {は/\*が} 何時に閉まりますか。
- (6) 木村さん {は/\*が} 誰と旅行しましたか。
- (7) 山田さん {は/\*が} 肉と魚ではどちらをよく食べますか。
- (8) 林さん {は/\*が} 日本語の本と英語の本と中国語の本の中で/うちでどれを一番たくさん持っていますか。
- (9) これ {は/\*が} ソースですか、醤油ですか。
- (10) 吉田さん {は/\*が} 海へ行きたいですか、山へ行きたいですか。
- (11) このみかん {は/\*が} 美味しいですか。
- (12) この自動車 {は/\*が} 日本製ですか。

ii) (1)～(12)の質問に対する答えでは、主語に「は」を付ける。(省略するほうが多い。)

- (13) (あの人 {は/\*が}) 山田先生です。<sup>3</sup>
- (14) (誕生日 {は/\*が}) 3月27日です。
- (15) (これ {は/\*が}) 数学の本です。
- (16) (私 {は/\*が}) クラシック音楽をよく聞きます。
- (17) (銀行 {は/\*が}) 3時に閉まります。
- (18) (私 {は/\*が}) 友達と旅行しました。
- (19) (私 {は/\*が}) 魚をよく食べます。

- (20) (私 {は/\*が}) 日本語の本を一番たくさん持っています。
- (21) (それ {は/\*が}) 醤油です。
- (22) (私 {は/\*が}) 海へ行きたいです。
- (23) ええ、(このみかん {は/\*が}) おいしいです。
- (24) いいえ、(この自動車 {は/\*が}) 日本製ではありません。

iii) 主部に疑問の焦点がある疑問文の主語には「が」がつく。

- (25) どの人 {が/\*は} 田中さんですか。
- (26) どちら {が/\*は} は京都行きの電車ですか。
- (27) 誰 {が/\*は} そんなことを言ったんですか。
- (28) どんな人 {が/\*は} 来ますか。
- (29) どちら (の方) {が/\*は} 若いですか。
- (30) ピンポンとテニスとバドミントンの {なかで/うちで} どれ {が/\*は} 一番面白いですか。
- (31) この白い建物が/??は工学部ですか。それとも、あの赤い建物 ({が/\*は} 工学部) ですか。
- (32) 今度の研究会では田中さん {が/\*は} 発表するんですか、山本さん {が/\*は} 発表するんですか。

iv) (25)～(32)の答えの文の主語には「が」が付く。

- (33) あの人 ({が/\*は} 田中さん) です。
- (34) こちら ({が/\*は} 京都行きの電車) です。
- (35) 山口君 ({が/\*は} 言ったん) です。
- (36) 大学生 {が/\*は} 来ます。
- (37) 山口さん (のほう {が/\*は} 若い) です。
- (38) テニス ({が/\*は} 一番面白い) です。
- (39) あの赤い建物 ({が/\*は} 工学部) です。
- (40) 山本さん ({が/\*は} 発表する予定) です。

i)～iv)の「は」と「が」の分布上の特徴の、全てではないとしても、多くは、話題と焦点について普通言われることで説明できる<sup>4</sup>。本稿では、上の例文の主語を右方転移するとどのような文になるかを考察する。

## 2. i)、 ii) の場合の主語の右方転移

- (41) 誰ですか、あの人 {は/\*が}。
- (42) いつですか、お誕生日 {は/\*が}。
- (43) 何の本ですか、それ {は/\*が}。

- (44) どんな音楽をよく聞きますか、山下さん {は/\*が}。  
 (45) 何時に閉まりますか、銀行 {は/\*が}。  
 (46) 誰と旅行しましたか、木村さん {は/\*が}。  
 (47) 肉と魚ではどちらをよく食べますか、山田さん {は/\*が}。  
 (48) 日本語の本と英語の本と中国語の本の中で/うちでどれを一番たくさん持っていますか、林さん {が/\*は}。  
 (49) ソースですか、醤油ですか、これ {が/\*は}。  
 (50) 海へ行きたいですか、山へ行きたいですか、吉田さん {が/\*は}。  
 (51) 美味しいですか、このみかん {が/\*は}。  
 (52) 日本製ですか、この自動車 {が/\*は}。  
 (53) 山田先生です、(あの人 {は/\*が})。  
 (54) 3月27日です、(誕生日 {は/\*が})。  
 (55) 数学の本です、(これ {は/\*が})。  
 (56) クラシック音楽をよく聞きます、(私 {は/\*が})。  
 (57) 3時に閉まります、(銀行 {は/\*が})。  
 (58) 友達と旅行しました、(私 {は/\*が})。  
 (59) 魚をよく食べます、(私 {は/\*が})。  
 (60) 日本語の本を一番たくさん持っています、(私 {は/\*が})。  
 (61) 醤油です、(それ {は/\*が})。  
 (62) 海へ行きたいです、(私 {は/\*が})。  
 (63) ええ、おいしいです (このみかん {は/\*が})。  
 (64) いいえ、日本製ではありません、(この自動車 {は/\*が})。

(1)～(24)とその右方転移対応表現(41)～(64)は、主語に「は」、「が」の付く可能性が全く同じである。Endo(1996)は、Kayne(1994)の考えに従い、右方転移文は法(Modality)主要部の指定辞位置と補部に同じ文が生成されており、補部から右方転移要素以外の部分を刈り込んで派生すると説明している。<sup>5</sup>

(65)=(41)[Modal P[CP[IP pro 誰ですか] C[Modal F] [Modal' [CP あの人は誰ですか] Modal [Modal F] ]]

↓  
刈り込み

(1)と(41)の主語の同一性は、(65)の[Modal F]の補部が(1)と全く同じ内容になることで説明される。しかしながら、この法性の正体が、わかるようでわからない不明なものであるように思われる。Endo(1996)は、次の例の指定辞位置にある「だ」、「ね」、「よ」のような要素がこの法性を表しており、主要部の法素性と照合して認可されていると主張している。

- (66) ダメ ??(だ)-??(ね)、君は。
- (67) 本当に馬鹿-??(ね)、あなたって。
- (68) 来た-??(よ)、バスが。

確かに、(66)～(68)で「だ」、「ね」、「よ」があったほうが自然な発話である。しかしながら、法要素が、その主要部に現れないというのは一体どういうことなのか、概念的に不明なところがあると言わざるを得ない。

### 3. iii)、iv) の場合の主語の右方転移

- (69) \*田中さんですか、どの人 {が/は}。
- (70) \*京都行きの電車ですか、どちら {が/は}。
- (71) \*そんなことを言ったんですか、誰 {が/は}。
- (72) \*来ますか、どんな人 {が/は}。
- (73) \*若いんですか、どちら (の方) {が/は}。
- (74) \*ピンポンとテニスとバトミントンのなかで/うちで一番面白いんですか、どれ {が/は}。
- (75) \*[工学部ですか、この白い建物 {が/は}。それとも、工学部ですか。あの赤い建物 {が/は} ]
- (76) \*今度の研究会では発表するんですか、田中さん {が/は}、発表するんですか、山本さん {が/は}。
- (77) \*田中さんです、あの人 {が/は}。
- (78) \*京都行きの電車です、こちら {が/は}。
- (79) \*言ったんです、山口君が/は。
- (80) \*来ます、大学 {が/は}。
- (81) \*若いです、山口さんのほう {が/は}。
- (82) \*一番面白いです、テニス {が/は}。
- (83) \*工学部です、あの赤い建物 {が/は}。
- (84) \*発表する予定です、山本さん {{が/は}}。

主語が疑問詞であったり、その一部に疑問詞が含まれていたり、主部に疑問の焦点があるような文の主語を右方転移すると、文法性はひどく悪くなる。このような、疑問節焦点の位置と主語の右方転移の可能性との間の相関関係が、Endo(1996)の考えでは説明できない。というのは、(65)に示した刈り込み操作は、主語、目的語が格照合のために VP から出ることによって、VP 刈り込みという主語と目的語の右方転移現象を統合的に扱えることを狙って工夫されているからである<sup>6</sup>。次節で、Richards(2010)に基づいて、疑問の焦点と右方転移の相関関係を説明する。

### 4. 疑問詞疑問文韻律句: Richards(2010)<sup>7</sup>

Richards(2010)は、言語はいろいろなレベルの韻律句構築のために韻律境界を形成していると述べている。より大きな韻律句を構築するときには、小さい韻律句の境界端が使われる。小さい韻律句の右端(right edge)を使うか左端(left edge)を使うかは、言語毎の変数になっている。さらに、疑問詞文の韻律句構築の条件として、(85)が提案されている。

(85) 疑問詞  $\alpha$  とその疑問詞によって疑問文となる節の補文標識は可能な限り少ない韻律句境界によって分けられなければならない。

(85)が英語と日本語でどのように働くかを見てみる。英語も日本語も大きい韻律句を構築する際に、既に存在する小さい韻律句の左端を使う。補文標識は英語では文頭に、日本語では文末にある。疑問詞疑問文の韻律句は疑問詞韻律句の左端と補文標識を使って、(85)を満たすように構築される。(86)では、( ) が韻律句を表している。

(86) 疑問詞疑問文韻律句

a. 日本語

[DP] [疑問詞句] [DP] V C

( ) ( ) ( ) ( ) . . . . . 小さい韻律句

( ) ( ) . . . . . 疑問詞疑問文韻律句

b. 英語

C [DP] [疑問詞句] [DP]

( ) ( ) ( ) ( ) . . . . . 小さい韻律句

( ) ( ) ( ) . . . . . 疑問詞疑問文韻律句

日本語では疑問詞と補文標識の間の韻律境界を消去することによって、(85)を理想的に満たすように疑問詞疑問文韻律句を構築することができるが、英語ではそれができない。たとえ、上に示したように、疑問詞とそれに後続する DP の間の韻律境界を消去しても、C と疑問詞句の間の韻律境界は改善されていないので、(85)を満たしているとは言えない。しかしながら、疑問詞句の左端と文頭にある補文標識とでより大きな韻律句を作るとは不可能なので、できる限り(85)を満たすために、英語では顕在的疑問詞移動によって、疑問詞をその疑問詞によって疑問文となる節の C の位置へ近づけさせるのである。一方日本語では、顕在的な疑問詞移動が無くても(85)を満たせる。

## 5. 疑問文韻律句による説明

Richards(2010)では、疑問文韻律句は疑問詞の左端と補文標識の位置(C)との間で(85)

を最適に満たすように形成されると述べられているが、第1節で見たように、たとえ疑問節に疑問詞が無くても（田口氏の指摘による）疑問の焦点が述部にあれば、主語には「は」が付く。これは、疑問文韻律句は疑問詞の左端と必ずしも関連付けられるわけではないことを示すものと考え、ここで次の仮定をする。(i)疑問節韻律句は、疑問詞の左端ではなくて、疑問節 TP 指定辞位置に来る要素の左端と補文標識の位置の間で(85)を最適に満たすように形成される。(ii)疑問の焦点が述部にある場合は、主語は疑問文韻律句内にはとどまれない。

Richards(2010)とそれに改訂を加える仮定(i)、(ii)によって、(1)とその主語右方転移文(41)、(25)とその主語右方転移文(69)の派生過程を示す。(1)、(41)、(25)、(69)を(87)、(88)の対文として再録する。

- (87) a. あの人 {は/\*が} 誰ですか。  
 b. 誰ですか、あの人 {は/\*が}。  
 (88) a. どの人 {が/\*は} 田中さんですか。  
 b. \*田中さんですか、どの人 {が/は}。

- (87)' a.<sup>1</sup> [CP [あの人は [TP e [誰です]]] [C か]]  
 ( ) 疑問文韻律句  
 a.<sup>2</sup>\* [CP [TP あの人が [誰です]] [C か]]  
 ( ) 疑問文韻律句

(87a<sup>2</sup>)'では、疑問の焦点が述部にあるにもかかわらず主語が疑問文韻律句内にあるので、仮定(ii)の違反である。

- (87)' b.<sup>1</sup> [[CP [e [TP e [誰です]]] [C か]] あの人は]  
 ( ) 疑問文韻律句  
 b.<sup>2</sup>\* [[CP [TP e [誰です]] [C か]] あの人が]  
 ( ) ( 疑問文韻律句の破壊

(87b<sup>1</sup>)'では、(87a<sup>1</sup>)'で示されているように、主語が話題化によって疑問分韻律句の外へ出ているので、その主語への右方転移操作は疑問文韻律句になんの影響も与えない。一方、(87b<sup>2</sup>)'では、主語の右方転移操作が、疑問文韻律句の左端を構成する要素を移動させることによって疑問文韻律句を破壊しているのである<sup>8</sup>。

- (88)' a.<sup>1</sup>. [CP [TP どの人が田中さんです] [C か]].  
 ( ) 疑問文韻律句  
 a.<sup>2</sup>\* [CP [どの人は [TP e 田中さんです] [C か]].

( ) 疑問文韻律句

(88a<sup>2</sup>)'は、主語が、疑問の焦点であるにもかかわらず話題化されているので、非文法的である。当然、その主語を右方転移しても非文法的である(88b<sup>2</sup>)'

(88)' b<sup>1</sup>. \* [[<sub>CP</sub> [<sub>TP</sub> e 田中さんです] [<sub>C</sub> か]]] どの人が]。

( ) 疑問文韻律句の破壊

(88)' b<sup>2</sup>. \* [[<sub>CP</sub> [e [<sub>TP</sub> e 田中さんです] [<sub>C</sub> か]]] どの人は]。

( ) 疑問文韻律句

(88a<sup>1</sup>)'にはなんの問題もないが、(88b<sup>1</sup>)'には問題がある。前者で問題なく確立されている疑問文韻律句が、後者では、右方転移によって破壊されている。

## 6. 結論

疑問文における主語の右方転移構文は、その疑問文の疑問の焦点が述部にあるのか主部にあるのかによって文法性が左右されるという事実を、Richards(2010)の疑問文韻律句の考えを修正することによって説明できることを論じた。

### 注

\*査読者、田口茂樹氏に感謝する。問題点を多く指摘していただき、おかげで、用語ミス、説明不足の箇所など多くの修正ができた。残っている問題はもちろん筆者の責任である。

<sup>1</sup>助詞に引用記号を付ける。

<sup>2</sup>主語以外の要素に付く「が」の事例もあるが、本稿ではそのような例は考察対象としない。主語以外の要素に「が」が付く構文に関しては、久野(1973) 参照。

<sup>3</sup>「が」も文脈次第ではもちろん許容できるが、(1)の答えとしては許容できない。以下の例についても同じである。

<sup>4</sup>例えば、「は」の話題標識としての資格によって、それが焦点性を求める疑問詞には付かないことは説明できるが、本文 i)で述べられている主語に「は」がつく特徴、つまり主語であるのに主語標識の「が」が付かないのはなぜか、簡単には述べられない。第5節参照。

<sup>5</sup> Endo(1996)では、疑問文における右方転移文は扱われていない。したがって、本稿における Endo(1966)への言及は、疑問文における右方転移を、Endo(1966)で示されている右方転移と同じ派生過程で派生させると考えた上でのことである。

(65)の特徴は、右方転移していない CP 要素を法 (Modal) 主要部の補部に、その法主要部の指定辞位置に、補部位置にある CP の最終的に右方転移したと見える部分を空要素 (pro) に置き換えた CP 要素を配置しているということである。補部 CP の最終的に右方転移したと見える部分以外を刈り込むことによって右方転移構文が作り出される。

<sup>6</sup> Endo (1996)の右方転移文の派生方法は、右方転移していない文の VP から、右方転移する要素が素性照合などの理由で VP の前に取り出されて、残った VP が刈り込まれるというものである。主語、目的語が共に格照合の理由で VP からその前に取り出されれば、共に右方転移要素となる。

<sup>7</sup> 初稿では、第4節で「代案」という見出しのもとに、Richards (2010)の考えに基づいた疑問文に

---

おける右方転移文の在り方を説明した。しかし、査読者田口氏の「より詳細かつ明快に説明する必要がある」の指摘を受け、本稿では、第節で Richards (2010) の関係部分の提示、第5節で疑問文における右方転移文のあり方のより詳しい提示を行うように変更した。

<sup>8</sup> (87b<sup>2</sup>)'は右方転移前の派生段階で仮定(ii)の違反であるので、右方転移とは関わりなしに許容できないと考えることもできる。

#### 参考文献

久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店

野田尚史(1985)『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ1 「は」と「が」』くろしお出版

Endo, (1996) 'Right Dislocation' in Formal Approaches to Japanese Linguistics 2, MIT Working Papers in Linguistics 29.

Kayne, R. (1994) The Antisymmetry of Syntax, MIT Press.

Richards, N. (2010) Uttering Trees, MIT Press.

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2012 月 1 月 4 日受理 2012 年 2 月 1 日採録決定